

●石仏論考

印西の十九夜塔と子安像塔探訪

蕨 由美

はじめに

千葉県北西部に位置する印西市は、平成二二年に印旛村・本埜村と合併し、現在は、利根川や印旛・手賀沼とその支流に面した低地に豊かな水田と旧村落が、そして下総台地の上には千葉ニュータウンが広がる田園都市である。

下総地方の十九夜塔は、茨城県つくば市内の寛永九年（一六三〇）の自然石型が発祥で、千葉県内には承応元年（一六五二）の香取市石納結佐大明神の宝篋印塔をはじめ、明暦く万治年間に香取市と山武郡での初期の造立事例があり、利根川流域から速やかに県内に伝わったことが、本誌前号で石田年子氏が報告（註1）されている。

なかでも利根川沿いで水運が盛んだった印西市域はいち早く十九夜塔を受容し、寛文五年（一六六五）の小倉青年

館の十九夜塔（写真①）をはじめ光背型如意輪観音像の十九夜塔が数多く造立された。江戸時代前期、典型的な十九夜塔が下総全体へ普及するに際して先駆的であった印西市域の十九夜塔造立は、下総地方と同様に江戸中期にピークに達するが、後期から陰りを見せ、以後、近代にかけては子安像塔へと変っていく。

本稿では、下総地方を代表する女人講造立の石塔として、印西市域の十九夜塔と子安像塔の事例を紹介していきたい。

一 印西市域の十九夜塔の像容事例

印西市域では寛文五年から寛文一〇年までの五年間に、二一基の十九夜塔が集中的に造立され、同時期の千葉県内の光背型如意輪観音像の十九夜塔三四基の約六割を占める。



③小林 光明寺・寛文9年



②和泉青年館 ・寛文8年



①小倉青年館・寛文5年



⑥吉田 万福寺・延宝6年



⑤白井市 延命寺・寛文10年



④ 中根 福聚院・寛文9年

寛文五年の小倉青年館の二臂像をはじめ、寛文八年の和泉青年館の六臂像（写真②）などは敵めしい表情の如意輪像であったが、寛文八年の松虫寺や、寛文九年の小林光明寺の六臂如意輪像塔（写真③）と同年の中根の福聚院の六臂如意輪像塔（写真④）など、主尊の顔立ちも女性的で美しく、一部透かし彫りが施されるなど、優れた像容の塔が多く造られる。

印西市の西に隣接する白井市平塚の延命寺の寛文一〇年の六臂の十九夜塔（写真⑤）も、これらの流れから周辺地域へ広がったのであろう傑作の一例である。

利根川下流域や印西市域から周辺市町域などに広がった光背型如意輪観音像の十九夜塔は、延宝年間には下総全体に普及し、その数約二三〇〇基に達する女人講の代表的な石塔となる。（註一）

その像容は、ほとんどが儀軌どおりの二臂如意輪観音像（写真⑥）であるが、安食卜杭子安観音堂の正徳二年（一七二二）銘の十九夜塔（写真⑦）のように天衣をまとう像や、印西市に隣接する我孫子市江蔵地の享保三年（一七二一）銘の十九夜塔（写真⑧）、岩戸伊付の宝暦十二年（一七六二）銘の十九夜塔（写真⑨）のように蓮華を持つ像もみられるようになる。



⑨ 岩戸伊付・宝暦12年



⑧我孫子市江蔵地
・享保3年



⑦安食卜杭子安観音堂
・正徳2年

二 下総での子安像塔の成立過程

江戸時代後期後半から下総地方では、如意輪観音像を主尊とした十九夜塔に替わって、子安像を刻んだ子安像塔が女人講の石塔を代表していく。筆者が調査(註2)した現在までを含むその数は、約一〇四〇基で特に、印西市域とその周辺では、教的にも群を抜いている。

子授けと安産を祈願する子安信仰は、石祠や丸石などを祀る原初的な基層信仰として、道祖神祭祀などとともに普遍的に存在したであろうが、「子安」と刻まれた石造物が下総地方に最初に現れるのは、八千代市上高野の子安神社の石祠で、元禄一六年(一七〇三)「子安大明神」の銘がある。

文字銘のみで像容のない子安塔としては、印西市域では元文三年(一七三八)浦部の鳥見神社の「子安大明神」銘の石祠(写真⑩)、松崎の火皇子神社の寛延三年(一七五〇)笠付角柱型の石

塔など一一基、下総地方全体では一一六基が主に神社境内に存在している。



⑩浦部 鳥見神社・元文3年

下総での最初の子安像塔が登場するのは、印西市の南東に隣接する酒々井町で、尾上住吉神社境内の享保十八年(一七三三)「子安大明神」銘の子安立像(写真⑪)である。



⑪尾上住吉神社・享保18年

酒々井町ではさらに、柏木新光寺墓地に、元文五年(一七四〇)「村中善女」銘の石祠に安置された丸彫り子安坐像が現れる。(図1上段)

一般に「子安観音」と通称される子安像塔は、十九夜塔など女人信仰の月待塔が多い利根川中流域から派生するといわれていたが、調査してみると、下総で子安像塔が生み出され、その普及の源となる地は、むしろ十九夜塔が少ない酒々井町域であり、主尊銘も「子安大明神」であった。

酒々井町の元文五年の小さな子安像塔は、肩と胸元に二

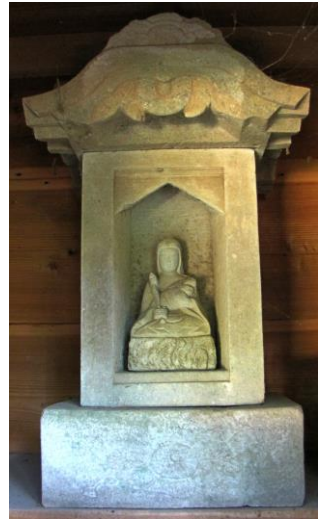
人の小児を配する特徴Ⅰ（二児型）と、石祠内に子安像がある特徴Ⅱ（石祠型）を兼ね備え、この両方の特徴を持つ事例は、酒々井町伊篠白幡神社・佐倉市大佐倉麻賀多神社・成田市飯仲住吉神社にあり、計四基となる。

特徴Ⅰの二児型のみの子安像塔は二六基あり、印西市域や栄町に多く、中でも滝の瀧水寺の安永五年（一七七六）「子安観世音」銘の子安像塔（写真⑫）は、今も美しい姿で祀られている。



⑫滝 瀧水寺・安永5年

特徴Ⅱの子安像を石祠内に安置または浮彫りした石祠型の子安像塔は、印西市浦部の鳥見神社の文化三年（一八〇六）銘の石祠（写真⑬）など、中期から後期にかけて下総全体で二三基ある。



⑬浦部の鳥見神社・文化3年

このⅠ二児型とⅡ石祠型の特徴のルーツは、上総地方の袖ヶ浦市百目木子安神社の子安像塔（図1左上）に求めることができる。祠の中に、肩と胸元の二児と共に主尊を浮き彫りにしたこの「子安大明神」銘の女神像は、元禄四年（一六九二）の銘をもつ。筆者の調査では、この子安像塔が千葉県内最古である。

以上のような成立萌芽期の二児型と石祠型の子安像塔は、仏教的儀軌による如意輪観音像を主尊とする十九夜塔とは異なり、原初的な神道祭祀の主尊「子安神」の姿を造像する過程で生み出された特異な石造物であると考えられる。



図1 千葉県の出現成立期の子安像塔

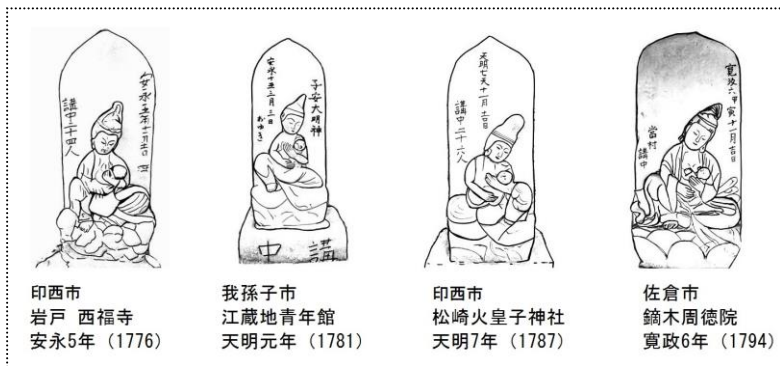


図2 印西市域に特徴的な子安像塔

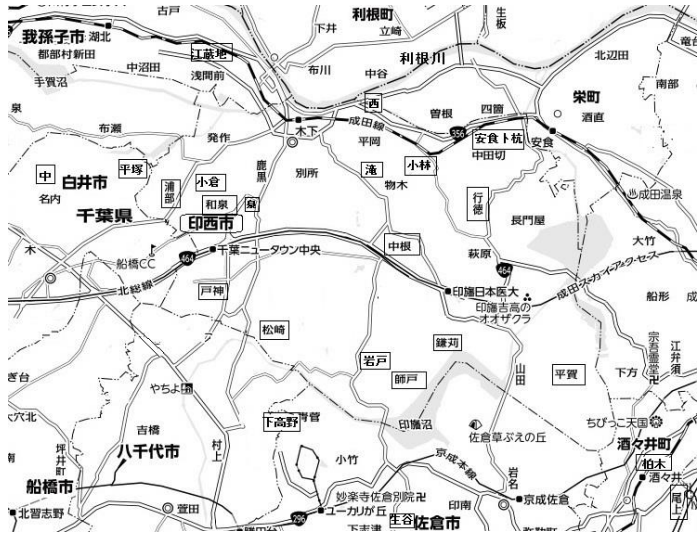


図3 印西市とその周辺の地図 (□は本文中の地名)

一方、利根川中下流域では、元文五年（一七四〇）「子安観音」銘の光背型子安像塔が栄町西に、元文六年「八日講」（出羽三山信仰の講）銘の子安像塔が香取市虫幡に造られる（図1）。半跏坐で懐に子を抱いたそれらの像容は、真正面を向いた大日如来像を彷彿とさせる姿で、湯殿山などの山岳密教と子安信仰が不可分であった可能性を示唆させる。また十九夜塔の主尊の如意輪観音像に子を抱かせた子安像塔も、宝暦元年（一七五二）酒々井町尾上住吉神社に登場する。右手を頬に当て左手に子を抱かせた姿で、「子安大明神」と「女人講中」の銘がある。（図1下段）

その後、この思惟相の子安像塔は、宝暦五年に印西市行7徳の稻荷神社に「十九夜念仏講中」の銘で建てられる（写真⑭）。続いて、明和元年（一七六四）に平賀の不動堂に「念仏講中善女」銘（写真⑮）で、さらに近くの観音堂にも同年に全く同じ姿で造塔されるなど、富里市・船橋市などの例を含め、下総全体では江戸中期で計一四基を数える。これらの大日如来像や思惟相の如意輪観音像に子を抱かせた子安像塔は、従来の十九夜など月待塔や念仏講の主尊の「子安観音」像として造像された可能性が高い。

このほか、岩戸の西福寺では、安永五年（一七七六）に両手で子を抱き、体を傾けて子を見つめる姿の子安像塔が



⑮平賀 不動堂・明和元年



⑭行徳 稲荷神社・宝暦5年

造られ、このスタイルは天明七年（一七八七）の松崎の火皇子神社をはじめ、岩戸の高岩寺や広済寺、荒野の安楽院など印西市域に七基あり、江戸中期のこの地域に特有な像容といふことができる。そしてこの像容は、江戸時代中期末に佐倉市や千葉市に伝播し、後期前半の代表的な像容として下総各地に広がっていく。（図2）

三 江戸後期からの子安像塔の発展と普及

江戸中期に酒々井町や柴町、小見川町（現香取市）、印旛地区などで創造された子安像塔は、その慈愛に満ちたやさしい姿が好まれ、後期には印旛沼周辺や利根川下流域から下総各地に広がる。化政文化の反映であろうか、蓮華や子をあやす玩具を持ち、天衣をまとう華麗な像や、泉会館の白衣観音風の清楚な像（写真⑩）など、個性的な作品が石工の創意と技で造られるようになる。



⑩泉会館・江戸後期

江戸後期の子安像塔の保存状態は軟質石材のため良好とはいえないが、祠内に安置されている八千代市島田台長唱寺（天保十一年）・鎌ヶ谷市鎌ヶ谷八幡神社（天保十四年）・白井市中薬師堂（弘化三年）・印西市戸神青年館（嘉永七年写真⑰）などでは、建立当時の美しい姿の子安像塔を見る

ことができる。



⑪ 戸神青年館（嘉永7年）

また後期では、目的や主尊の格をあらわす銘も、台石などに大きく「女講中」あるいは「女人講中」と記すように変化する。おそらく建塔する講の性格も、女人救済の念仏主体の講から、安産と子育てを祈願し、集落の女性たち共同体の親睦を深める目的の子安講へと変わっていったのであろう。

四 近代から現代へと続く子安像塔

幕末のころ、下総地方では、子安像塔は如意輪観音像の十九夜塔を凌駕する数が造塔されるようになり、明治時代以降は、女人講が建立する石造物の主流となる。明治から

大正期の終わりまでの造塔数は五八年間に三四八基という数にのぼるが、一方、その地域差も大きくなる。

明治維新時廃仏毀釈が激しかった香取神宮の信仰圏の利根川下流域と東総地域では、維新後、十九夜塔の造立も無くなり、子安像塔に切り替わるが、その数は多くはない。

また、江戸期を通じて十九夜塔の数も低調だった市川市など江戸川下流域では、子安像塔に切り替わることなく、女人講による造塔は、近世の終焉とともに幕を閉じる。

一方、印西市と印旛沼周辺の地域では、幕末に子安像塔に替わるが、講の名称として「十九夜」の銘を残す子安像塔もある。何年かおきに造塔する習俗も、印西市域では、造佐倉市・八千代市・白井市などに多く、印西市域では、造谷の真珠院・角田の薬師堂・師戸の広福寺・鎌苅の東祥寺などの寺院や旧仏堂の境内に、数基以上の子安像塔が並ぶ光景も珍しくない。

近代の子安像の像容は、未敷蓮華を高く持ち、天衣を翻す像が多く、また自由な発想によるふくよかな授乳姿の母子像など変化に富むが、模倣による類型も地域ごとに多い。授乳する姿の母子ともに豊満な像が、大正時代の八千代市以西を中心にみられるが、これらは富国強兵を背景に『産めよ増やせよ』の時代で、また宗教的な因習を排し、母子

保健に力が注がれた時代であったことを象徴しているように思われる。

印旛沼周辺の地域における近現代の代表的な像容は、蓮華と天衣が特徴の戸神青年館の明治十九年（一八八六）の子安像塔（写真⑱）で、細部まで同じ意匠の類型は四三基、天衣はないが同じ姿の類型は一六基を数える。

また小林光明寺墓地の大正七年（一九一八）の子安像塔（写真⑲）など、高く角張った宝髻と丸顔に沿った垂髪で授乳する姿が特徴的な子安像塔の類型は、印西市域中心に一八基ある。



⑲小林 光明寺墓地・大正7年



⑱戸神青年館・明治19年

現代に入ると、戦後の一時期は造塔も少なく、あっても石工の技量の乏しい像が多い。その後の都市化や少子化で、子安講も解散した地域もみられるが、師戸の広福寺（写真⑳）、鎌苅の東祥寺、松崎の中郷多聞院、前戸向堂などでは、平成に入ってからもお造塔が続いており、また八千代市下高野の福蔵院や高津の観音寺、佐倉市生谷の専栄寺では、平成二十年以降の新しい子安像塔も見ることができ。



⑳師戸 広福寺・平成6年

おわりに

旧印西町（現在の印西市印西地区）と北総の女人信仰の民俗と石造物に関しては、榎本正三氏の丹念な調査研究があり、筆者もその著書（註3）に触発されて、千葉県北部に多い子安像塔の調査とその像容の成立過程を追ってきた。本稿の印西地区の十九夜塔と子安像塔は、榎本氏の著書と印西町教育委員会発刊の『印西町石造物第一〜八集』を

参考に調査したが、実際にこの地域の石造物探訪をするには、その総集編の『石との語り』(一九九二年)が、概略地図入りでコンパクトにまとまっていてお勧めである。

また、合併で印西市域となった本埜地区と印旛地区の石造物については、千葉県立中央博物館所蔵のデータベース(註4)に基づき調査を行った。

なお、下総地方の女人講石造物の所在地などのデータについては、石田氏の「千葉県・十九夜塔造立年順一覽」の表(註1)に最古から100基の十九夜塔のデータが、子安像塔データについては拙書(註2)の各一覽表に掲載してある。

祈りの表象である石仏、そのなかでも十九夜塔と子安像塔には、子授け・安産・子育てという女性たちの生活の密着した具体的な願いが込められており、また、仏像の儀軌にとらわれない子安像塔は、女性たちの希望と石工の創意工夫が遺憾なく発揮され、他の石仏にはない像容のおもしろさがある。

ニュータウンを背景にした印西の旧村のたたずまい、その景観を味わいながら、優しいお顔の石仏に出会う至福のひとつを大切にしたいと思う昨今である。

【註と参考文献】

- 1 石田年子 二〇一五年「下総地方の十九夜塔」『日本の石仏』一五三号 日本石仏協会
- 2 蔵由美 二〇一〇年「北総の子安像塔の系譜―江戸時代中期におけるその出現と成立について」『房総の石仏』第二〇号 房総石造文化財研究会
- 同 二〇一一年「北総の子安像塔―江戸時代後期(文化と天保期)の展開について」同 第二二号
- 同 二〇一二年「北総の子安像塔―江戸時代末期から現代までの様相について」同 第二二号
- 3 榎本正三 一九九二年『女人哀歎―利根川べりの女人信仰』崙書房
- 同 一九九三年「北総の子安塔とその背景」『日本の石仏』六六号 日本石仏協会
- 4 白井豊・吉村光敏・吉田文夫・西岡宣夫「下総地方中部8市町村(習志野市・佐倉市・成田市・四街道市・酒々井町・八街町・印旛村・本埜村)石造文化財データベース2011年版」。

(文中、印西市内の地名は、市名を省略しました。)